



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

CITATION:

雑報. 天界 1928, 8(86): 239-242

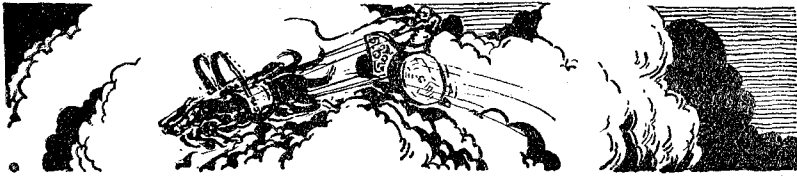
ISSUE DATE:

1928-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161273>

RIGHT:



雑 報

太陽コロナの正體？

アメリカのシカゴ大學ライアソン物理學實驗室で Freeman 女史が研究した所による、アルゴン瓦斯のスペクトルの中に太陽コロナ中の輝線に相當する多くの波長を發見したといふ。コロナのスペクトル輝線としてはリク天文臺の Campbell, Moore 兩氏が1918年の日蝕觀測によつて得たものが今日最も正確なものと思はれてゐるが、Freeman 女史は此の中の18本の光線を見事にアルゴン線であるを證明した。(Nature 3040; Astrophysical Journal)

日蝕以外にコロナ寫眞

皆既日蝕でない時、即ち平常の日に太陽コロナの寫眞撮影をする試みは Wilson 山天文臺の G.E. Hale 博士を始め、多くの人が今まで皆失敗した歴史を持つてゐる。しかるに近頃ドイツの G. Blunck 氏は波長8000Å附近の赤外光線を使用して、見事に此の試みに成功したを報ぜられてゐる。今後はいよいよ日蝕の遠征が餘り必要でなくなるか？(Astronomischen Nachrichten 5539)

アインシュタイン説のため今一つの實證

相對原理の實證としては

1. 水星の近日點運動 2. 日蝕の際の星像移動 3. 太陽スペクトル線の變位の三つがあつて(「天界」第13號から第15號)、今迄の研究結果は皆此の新原理を肯定するものであるが、しかし各國の天文學者や物理學者の中には保守論者もあつて、今尙ほ之れを疑つてゐる向も少なくない。米國 Columbia

大學の C.L. Poor 教授が、上記の第2の實證を今一步確證するため、日蝕の際の月の直径の測定を唱へてゐるのは1923年以來の事である。ところが、去る1926年初スマトラの日蝕觀測に行つた J. A. Miller 教授(「天界」第377頁に來朝記事と寫眞がある)は其の觀測當時の寫眞で月の直径を測定したが、結果、月の直径は日食の時も平常の時も少しも差違無きことが明らかとなり、従つて、相對原理のために一つの有力なる肯定的實證が擧げられたわけである。

宇宙エーテル流の新研究

アインシュタイン教授の相對原理の一大根據となつてゐる Michelson 及び Morley の「宇宙エーテル流」の實驗は有名なものであるが、數年來米國の D.C. Miller 教授は Wilson 山其の他で此の實驗を繰り返して、エーテルが地球と共に或る流れを現はしてゐることを見て、相對原理に一種の暗影を投けたと言はれてゐる。(「天界」第57號及第58號英文欄参照)しかるに昨1927年九月16日と17日、白國 Bruxelles の A. Piccard, E. Stahel 兩氏はスヰス國 Lurem 市の東19キロの Rigi 山(海拔1800米)上で此の種の實驗を行つた所、エーテルの流れを少しも認めず、昔の Michelson 等の結果と全く同じ結果であつたといふ。(Naturwissenschaften, 第16卷第2號)

新プラネタリウム

ツアイスのプラネタリウムが、ドイツ國內十數ヶ所に設けられ人心の天空への憧れを満足せしめてゐることは度々記したが、近頃ドイツ國外にも之れが設けられ、中にも

米國ニウヨーク市

露國モスクヅ市(元のサーカス・ビーディング内)

伊國ローマ市

ローマのは今年十月29日に之れを公開する由。

ハーバード天文臺の南亞出張所

米國ハーバード大學は1890年以來南米ペール國アレキバに出張所を設けて南天の觀測をやつてゐるが、最近、此のアレキバを止して南アフリカの

オレンジ自由洲ブルームフオンタイン (Bloemfontein) 市から14マイル離れたマゼルスポート (Mazelsport) 市郊外 Kopjes 丘上に器械を移し、去る1927年7月1日から観測を開始した。主任は J. S. Paraskevopoulos 夫妻である。目下使用される器械は「10吋」乃至「8吋」級のものであるが、將來は「24吋」の屈折機と「60吋」の反射機が据え付けられる筈——此の二つの大器械は目下米國ピツバークの Fekker 會社で製作中である。尙、Fekker 社では今ヤーキース天文臺のために「12吋」の眼視及び寫眞用の雙子機 (Twin-telescope) を作つてゐる。

パリ學士院の天文賞

昨年末に於ける恒例フランス學士院(アカデミイ)の總會に當り、諸學者に授けられた賞の中で、天文學に關するものは、

「ラランド賞」 星流研究の賞として Vincent Nechville 氏へ

「ブルツ賞」 太陽研究の賞として Lucien d'Azombnja 氏へ

「ド・ボンテクーラン賞」 トロイ群の小遊星の運動解析論研究の賞として Emile Paloque 氏へそれぞれ授與された。

今年のローヤル賞

毎年の例により今1928年英國ローヤル天文學會總會に於て金牌を授けられるのはエデンバラ王立天文臺長 R. A. Sampson 教授である由、教授の功績は主として木星の四大衛星の運動理論の完成である。

尙ほ、此の機會に、同會から

W. H. Steavenson 博士(變光星及びハーシエル器械研究)

W. Reid 氏(6個の新彗星發見)

の兩氏にジャクソン・ギルト賞(銅牌)を贈るこゝとなつた。

人 事 消 息

インネス博士引退 永く南アフリカのユニオン天文臺長として、南天の二重星研究及び掩蔽問題の權威者であつて R. T. A. Inness 氏は昨1927年末を以て定年引退した由 (Science 1722) (「天界」第 號第 頁參照)

キンストナー教授退職 永くドイツ國ボン大學天文學教授兼天文臺長であ

つた Küstner 氏は今回退職し、後任にはポツダム天文臺から A. Kohlschutter 博士が就任した。キュストナー氏は第十九世紀末に緯度變化の事實を觀測上から發見した最初の人であつて、此の發見から世界的の大問題を惹き起し遂に水澤等の國際緯度觀測所の設立を見るに至つたものである。

ペリエー氏昇進 フランス國アカデミ會員であり、又、國際測地學同盟幹事として永く敏腕を根つてゐる Perrier 大佐は、去る九月17日附を以つて將軍 (Général) に昇進した。(「天界」)第52號第159頁及第161頁

早乙女情房博士 三月末に定年退職された平山信博士の後任として、同博士(本會員)は今般第3代目の東京天文台長に就任された。

木村 榮博士 來る七月初めオランダ國ライデン市で開かれる國際天文同盟第3回總會に日本代表員として、平山信氏と共に、出席せられる由。

天 文 學 專 攻 の 新 理 學 士

去る三月末を以つて、京都帝國大學理學部から下記2名の新卒業生を出した。何れも本會員である：一

上島 昇君 (卒業論文は英文で Studies on Solar Atmosphere)

渡邊 敏雄君 (同 獨文で Über die Mira-Sterne)

尙ほ又、同期に、東京帝國大學理學部からは

川端 幸夫君

が天文學科を卒業した。

京都帝大の天文學專攻の新入學生

今春、下記の9名が京都帝國大學宇宙物理學教室に入學した。

本科： 猪口義夫，村上忠敬，公文武彦，小山秋雄，三浦清治，

柴田淑次

計6名

撰科： 大楠，小林道德，浦牛原初藏

計3名